

中国情報

中嶋嶺雄

中国知識人の運命

復活をしても「生ける屍」に

二の夏に中国で十全大会が開かれたことには、余勢をかって懸案の全国人民代表表大会が間もなく開かれるだろう、との推測しきりであったが、いまだに開かないところをみると、今年もついに、その開催が不可能であるらしい。

もっとも九年まえの前回の場合、年未から年始にかけて開かれていたので、またま

旬に中国の有名な作家・茅盾（ぼつじゅん）が復活したことはあまり知られていない。

茅盾（本名・沈雁冰）といえは、現代中国の代表的作家の一人であり、文化大革命が始まるまでは国務院文化部長でもあった人物だが、六五年五月以降、彼の原作映画「林家鋪子」がブルジョア的作品だとして激しく批判され、やがて前回の全国人民大会では文化部長を解任さ

とあかく、中国の場合、このようにいったん失脚した知識人が復活することはいはばはみられるところであり、今春には世界的に著名な社会学者・費孝通が実に十五年ぶりに復活している。費孝通は一九五七年の「百花齊放・百家争鳴」運動の時期に、共産党の言論抑圧に対する当時の知識人の懷疑を代表して、「知識分子の早春の天気」と題する論文を「人民日報」（五七年三月二十四日）

だ断定はできないが、十全大会以後の中国の政治情勢には「潮流と反潮流」、「復活（反復活）」の激しい闘争が渦巻いていて、全国人民代表表大会が正常な状態を開かれそうなる見当がなはなしてある。

れたのであった。その茅盾が今回は中国人民政治協商会議全国委員会副主席の肩書で復活したのである。

座を北京大学に設けようとしたところをも非難されたのである。この費孝通も復活したのだが、問題は復活した知識人が自由にか雲・學術活動を再開できるかどうかである。この点では状況はいぜんとしてきびしく、復活した知識人はいわば面従腹背をいられた「生ける屍」でしかないことはいまもな

一方、孔子批判や秦始皇評価のキャンペーンはいぜんとしてかまびすしく進んでいるが、つじつと中での十一月中旬に中国の有名な作家・茅盾（ぼつじゅん）が復活したことはあまり知られていない。

に書いた北京大学教授であったが、やがて反右派闘争の段階では悪質な右派分子たとして激しく批判され、しかも「ブルジョア科」である社会学の講

（東京外大助教）